様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２３５

研究課題名（和文）20世紀のキルギス共和国とカザフスタンにおけるアクン技芸

研究課題名（英文）Akyn Performances in Twentieth-Century Kyrgyz Republic and Kazakhstan

研究代表者
ウメトバエワ　カリマン（Umetbaeva, Kalyiman）

東京藝術大学・大学院音楽研究科・研究員

研究者番号：７０７７１９８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：キルギスとカザフスタンにおけるアクン技芸の比較研究は、これまで成されたことのないテーマである。本研究により、新たな視点から両国におけるソ連時代崩壊後のアクン技芸の現状が明らかになり、音楽的側面からの分析も進めることができた。現地調査ではソ連時代に活躍した高齢のアクンにもインタビューすることができ、カザフやキルギスの研究者とのネットワークの構築にも貢献した。本研究の成果については、日本中央アジア学会、口承文芸学会、東洋音楽学会で発表し、音楽、社会、政治、文学等の分野に示唆を与える内容になったと確信する。今後は、これまで収集してきた資料をさらに整理・分析し、日本語で論文を刊行することを目標とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究ではキルギスとカザフスタンにて現地調査を行い、数多くのビデオ録画や音源、関係者のインタビューを収集することができた。これらを第一次資料として整理保存・維持し、今後の研究に役立てることができるようになった。また、本研究の目的である音楽的側面からの分析については、旋律を楽譜におこしその由来を明確にすることを通じ、両国のアクン技芸の特徴を抽出することができた。更に本研究の学会発表・論文執筆により、世界中の口頭伝承が消えつつある現状とその問題に耳目を集める一助ともなるうえに、キルギスとカザフスタン両国が共通の音楽文化を通して相互理解を深め、良好な関係を築くきっかけになるものであるとも期待する。

研究成果の概要（英文）：This comparative research examines the mostly overlooked akyn performances of Kyrgyzstan and Kazakhstan, revealing multiple situations of akyn performances in both countries during the post-Soviet era and analyzes the musical aspects of the performances. This research's fieldwork includes interviews with many akyn performers, including a master active during the Soviet era. Furthermore, connections and networking between researchers in Kyrgyz and Kazakh were strengthened with the hopes of possibly facilitating further investigation on this topic.
This research has been presented at the Japan Association for Central Asian Studies, the Society for Folk-Narrative Research of Japan, and the Society for the Research of Asiatic Music revealing this study's importance for other fields of research such as musicology, sociology, politics and literature. The future goal is to continue the analysis of documents collected to date and publish an article, in Japanese, on this research.

研究分野：民族音楽学

キーワード：中央アジア　キルギス　カザフスタン　アクン技芸　aitysh　伝統音楽　口承文芸

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．　研究開始当初の背景

研究対象となっているアクンとは、楽器（キルギスではコムズ、カザフスタンではドンブラ）を弾きながら即興で歌い、話芸を行う芸能者を意味し、二人以上のアクンが即興の歌で競い合うことをアイトゥシュ（キルギス）またはアイトゥス（カザフスタン）と呼ぶ。これはウィットに富んだ鋭い内容の歌の応酬でどちらがどれだけ聴衆を笑わせることが出来るのかで勝負が決まり、アクンの力がもっともよく現れる場である。

アクンに関する先行研究としては、A. ザタエヴィチ（1869-1936）と V. ヴィノグラドフ（1899-1993）による次の諸著作が挙げられる。(1)Виноградов, Виктор, 1961, *Музыкальное наследие Токтогула.* (2)Виноградов, Виктор, 1939, *Музыка советской Киргизии.* (3)Виноградов, 1952, *Токтогул Сатылганов и киргизские акыны.* (4) Затаевич, Александр, 1971, *Киргизские инструментальные пьесы и напевы.* (5) Затаевич, 1934, *250 киргизских инструментальных пьес и напевов.* これらは、20 世紀初期のアクンが紹介されている数少ない資料あり、アクンの社会的な役割や、歌の内容、当時アクンが直面していた問題について記録している点で重要であるが、音楽的な分析が十分に行われていない。そのうえ、(5)でザタエヴィチが残した楽譜と記録は最初期のもので貴重である一方、採譜の際には録音機械は一切使わず、実際の演奏を聞きながら手写したものであったため、信憑性と正確性に乏しい。

彼ら以降もアクンは研究され続け、最近でもアクンの詩を詳細に分析し、詩がどのような意味内容を持っているか、どのような社会的要素と結びついているのか、などの解明が試みられている。しかし、現在の研究はいずれも文学・言語学の分野からアプローチするもので、音楽、特に旋律に関しての言及は最小限にとどまっている。つまり、体系的な音楽研究は、ザタエヴィチとヴィノグラドフ以降ほぼ皆無と言ってよい状況である。さらに、上記の近年の著作はいずれもカザフスタンのアクンとその技芸を調査したもので、キルギスのアクンは考慮されていない。カザフスタンのアクンに比べると、キルギスのアクン研究は進んでおらず、当然その音楽の実態も不明である。

２．　研究の目的

本研究は、中央アジアに位置するカザフスタン共和国とキルギス共和国で収集した資料を元に、当地で行われている“アクン技芸（アイトゥシュ／アイトゥス）”の現状を明らかにし、音楽的側面から分析することを目的とする。

３．　研究の方法

研究方法としては、先行研究や音源などの収集と音楽・旋律の精査をはじめ、アクン技芸に携わる人びとへのインタビューや演奏会などのフィールドワークと、日本での調査結果の分析である。研究場所は主に、東京藝術大学の民族音楽研究室をはじめとする同大学内の諸機関であり、フィールドワークの場所はキルギスの首都ビシケク市およびカザフスタンの首都ヌルスルタン市（旧・アスタナ市）とアルマトゥイ市の 3 ヶ所であった。

４．　研究成果

キルギスでは、首都ビシュケク市に設立された若手のアクンを育成するための唯一の学校「アイトゥシュ」（Айтыш：2001 年設立）、キルギス国営テレビ局、チュイ県のトクモク市のチュイ県立子供音楽学校（Чуйская детская музыкальная школа）、ケゲティ村

の小中学校での音楽の授業を調査の対象とした。

2015 年にキルギスにおいて初めて調査を行った際、若手のアクンを育成するための学校がビシュケクには一校しかないということが判明した。現在キルギスとカザフスタン両国で、ソ連時代に一度は廃れたアイトゥシュの復興が行われているが、キルギスでアイトゥシュが復活したのはこの学校を設立したサディック・シェル・ニヤズ（Садык Шер-Нияз）（1969～）の活動に端を発する。現在、「アイトゥシュ」学校の生徒は約 30 名、教員は 3 名である。教員のうち、クトゥマナリエフ・アマンタイ（Амантай Кутманалиев）（1966～）とイマナリエフ・エルミルベック（Эльмирбек Иманалиев）（1978～）は現役アクンであり、ソ連崩壊後から現在にいたるまでキルギスでのアクン技芸の現状や、アイトゥシュの復興運動について、彼らのインタビューから明確にすることができた。また、クトゥマナリエフ・アマンタイはキルギスでアクンが使用するすべての旋律を知っており、演奏することも出来たため、その録画を元にして現在旋律を楽譜におこす作業の主な資料となっている。そして、キルギスで最も人気を集めるアクンのトゥトゥクチェフ・アール（Туткучев Аалы）（1983～）や、「アイトゥシュ」学校の生徒たちのインタビューからアクンが生育されている過程について明確にすることができた。

カザフスタンでは、首都ヌルスルタン市においてはカザフスタン国立芸術大学（Казахский национальный университет искусств）伝統音楽芸術学科（факультет традиционного музыкального искусства）・伝統歌学科（кафедра традиционного пения）、カザフスタン国立芸術大学に属するコルク・アタ科学研究所（Научно-исследовательский институт им. Коркыт-ата）、グミリョフ・ユーラシア国立大学（Евразийский национальный университет им. Л.Н.Гумилёва）のカザフ文学学科において、またアルマティ市ではクルマンガズ・カザフ国立音楽大学（Казахская национальная консерватория имени Курмангазы）で調査を行った。

2016 年に初めてカザフスタンで現地調査を行った際、カザフスタンではキルギスとは異なり、アクン技芸とアイトゥシュの研究が活発化していることがわかった。ただし、どちらの国の研究でも技芸の歌詞を重視しており、歌を文字におこし、その内容を調べるという手法で研究が進められていることが把握できた。特にカザフスタンではグミリョフ・ユーラシア国立大学のカザフ文学学科において出版された『アイトゥスを知ろう』（*Айтыстану.*）（2013）、アマンジョル・エルタイ（Аманжол Өлтай）の『アクン・ジラウの詩』（*Ақын-жыраулар поэзиясы.*）（2013）、ムサ・アフメット・オスパンウリ（Мүса Ахмет Оспанұлы）の『カザフ・キルギスの文学での相互関係』（*Қазақ Қырғыз жырларындағы бірлестік*）（2011）、などの書籍においては、文学・言語学の視点から研究されている。また、ミシガン大学のエバ・マリヤ・ドュヴュイッソン（Eva-Matie Dubuisson）の博士論文『代弁者の価値：カザフのアイトゥスにおける文化と批評』（*The Value of a Voice: Culture and Critique in Kazakh Aitys Poetry*）（2009）では、アイトゥスの言葉を通して語られる文化と政治・経済関係について、人類学の視点から論じられている。このように、カザフスタンのアイトゥス研究において、音楽、特に旋律に関しての言及は最小限にとどまっていた。しかしコジャフメトワ・ジャングリ（Кожахметова Жангуль）によって書かれた論文『カザフのアイトゥスの音楽』（*Музыка казахского айтыса*）（2012）においては、カザフのアイトゥスを音楽の側面から分類し、現在活躍しているアクンについて述べている。この論文の最大の特徴は、アクンが歌う旋律を楽譜にうつしていることにあり、さらにアクンが使用する楽器・ドンブラの役割、ドンブラと歌

詩の関係について論じているため本研究にもっとも近い著作であり、分析の手がかりとして参考にしている。

このように、研究も盛んにおこなわれているカザフスタンでのアイトゥスであるが、その復興が始まったのはエルマン・ジュルスン（Ерман Жүрсін）（1951～）の尽力によるものであることが 2016 年の調査で明らかになった。ジュルスンはソ連時代の 1974 年に初めてのアイトゥスを行い、現在は大規模なアイトゥス「アルトゥン・ドンブラ」（Алтын домбыра）の主催者となっている。ジュルスンのインタビューから、ソ連時代崩壊前後の時期から現在に至るまでのカザフスタンのアイトゥス復興のプロセスを把握することができ、社会、歴史、政治的側面を合わせて理解を深めることが出来た。また彼の主催する「アルトゥン・ドンブラ」（2016 年 12 月 3～4 日）を見学することも許され、そこでの録画・録音をカザフスタンのアイトゥスを音楽的側面から分析するための主な資料として得ることが出来たのは大きな成果である。

更に、カザフスタン国立芸術大学に属するコルク・アタ科学研究所の言語・文学研究者のアルムハノワ・リザ（Алмуханова Риза）（1964～）、カザフスタン国立芸術大学 伝統音楽芸術学科 伝統歌学科のアクン専攻でアクンを目指す学生や、アクン専攻唯一の教員で現役アクンでもあるカイナザル・エルケブラン（Қайназар Еркебұлан）(1984～)、クルマンガズ・カザフ国立音楽大学のウテガリエワ・サウレ（Утегалиева Сауле）教授を主なインフォーマントとして聞き取り調査を行い、カザフスタンで出版された関連資料の収集や、彼らを通しての他のアクンたちとのネットワークを作ることができた。

これらの資料収集・分析を通して研究をすすめるとともに、2018 年の 8 月にキルギスで開催された「第三回世界ノマド・ゲーム（世界遊牧民競技大会）」のプロジェクトの一環としてビシュケクで行われた学会（”Живое наследие : кочевые традиции в прошлом и современном контексте” 2018 年 8 月 22 日）に参加した。そこで遊牧民文化を研究しているカザフスタンとキルギスの研究者と交流し、資料及び最新情報の交換などを行った。また、ここでの口頭発表により自分の研究を広く世界に紹介することができた。また、この学会ではカザフ国立音楽大学所属の民族音楽学者アルミラ・ナウリズバエワ（Альмира Наурызбаева）教授にインタビューすることが出来、彼女との資料交換を行うことにより、更に研究をすすめる手がかりを得た。また、「第三回世界ノマド・ゲーム」で行われたキルギス対カザフスタンのアイトゥシュを録画し、本研究の貴重な資料とすることが出来た。

キルギスとカザフスタンにおけるアクン技芸の比較研究は、これまでなされたことのないものである。またその音楽としての側面に注目した研究というものは、研究者自身が音楽家ならではの視点となり、非常にユニークなものであると自負している。

本研究により、まず、新たな視点から両国におけるソ連時代崩壊後のアクン技芸の現状が明らかとなった。現地調査ではソ連時代に活躍した高齢のアクンにもインタビューすることができ、カザフやキルギスの研究者とのネットワークの構築、数多くのビデオ録画や音源を収集することができた。これらを第一次資料として整理保存・維持し、今後の研究に役立てることができるようになったのは成果として大きい。また、本研究の目的でもある音楽的側面からの分析については、採録した旋律を楽譜におこしその由来を明確にすることを通じ、両国のアクン技芸の特徴を抽出することができた。

更に本研究の学会発表・論文執筆により、世界中の口頭伝承が消えつつある現状とその問題に耳目を集める一助ともなる。さらにキルギスとカザフスタン両国が共通の音楽文化を通して相互理解を深め、良好な関係を築くきっかけになるものであるとも期待する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 「ソ連崩壊前後のクルグズ共和国とカザフスタンにおけるアイトゥシュ/アイトゥスの復興」、ウメトバエワ・カリマン、『ユーラシア研究』No.56, 2017 年 8 月、65～68 頁（査読有）
② 「「オルド　サフナ来日公演 2017」を通した現在のクルグズ共和国の音楽と楽器の考察」、ウメトバエワ・カリマン、『伝統と創造』No.7, 2017 年 3 月、67～78 頁（査読有）

〔学会発表〕（計 4 件）

① 「ソ連時代崩壊後のクルグズとカザフスタンにおけるアクン技芸・アイトゥシュの普及」、ウメトバエワ・カリマン、（第 43 回日本口承文芸学会）、2019 年 6 月 2 日、沖縄国際大学
② 「アクン技芸の音楽構造の分析：新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物（Oral Narrative）」、ウメトバエワ・カリマン、（日本中央アジア学会（JACAS））、2019 年 3 月 23 日、KKR 江ノ島ニュー向洋
③ 「ソ連崩壊後のクルグズ共和国とカザフスタンにおけるアクン技芸」、ウメトバエワ・カリマン、（CIRAS ユーラシア・セミナー）、2018 年 2 月 9 日、京都大学　東南アジア地域研究研究所
④ 「ソ連崩壊後のクルグズ共和国とカザフスタンにおけるアクン技芸」、ウメトバエワ・カリマン、（東洋音楽学会　第 68 回大会）、2017 年 11 月 12 日、沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。